

病気とは何か——価値判断の果たす役割を再考する——

石田 知子 (Tomoko Ishida)

慶應義塾大学通信教育部

病気 (disease) をどのように特徴づけるべきかという問題は多くの論者によって議論されてきたが、未だ完全な合意には至っていない。この問いに対する個々の論者の答えは、病気概念は生物学のみによって定義できるという立場と、何らかの価値判断や規範を含むという立場の二つに分けることができる。前者の中で最も有力なものの一つは、「病気とは機能不全である」と考える立場であるが、これに対する批判も多く、広く受け入れられているとは言えない。現在、より有力なのは、後者の立場である。しかしながら、病気概念の持つ価値判断や規範がどのようなものであるのかについては、必ずしも明確であるとは言えない。本発表では、Cooper (2002) による「病気」の特徴づけを手掛かりに、それらのありかたを分析する。

Cooper による病気の特徴づけは以下の通りである。ある症状について、

- ① それを持つことは悪い (bad) ことであり、
- ② 不運 (unlucky) でもある。そして、
- ③ それは医学的に治療できる可能性がある

という三つの条件を満たすとき、その症状は病気であると言える。これら三つの条件はみな、以下で説明するように、価値判断的な要素を含んでいる。

まず、病気の悪さとは一体どのようなものであるのかを考える。明らかに、身体的な痛みや苦しみは、病気にしばしば伴う悪さである。それでは、精神的な苦しみについてはどうか。もちろん、ある人が日常生活に大きな支障が出るような精神的苦しみを感じている場合、その人は何らかの（多くの場合、精神科領域の）病気に罹患していると考えられるだろう。だが、日常生活に支障が出るとは到底言えない場合、その苦しみは病気が原因であるとはみなされない。これは、日常生活に大きな支障が出ない程度の身体的な痛みや苦しみも医療行為の対象になりうることと対照的である。

また、病気の悪さは誰にとってのものであるのかという問題もある。例えば、Reznek (1987) は、ある人が病気であるとは、標準的な状態において集団のメンバーにとって有害であることを含意すると述べている。つまり、ある症状を持つ本人がそれを悪いことだと思っていなくても、周囲がそれを有害だと考える場合、その症状は病気となる。一方、Cooper はそれを否定しており、病気の悪さはあくまで本人にとってのものであると述べている。

次に、②について、ある症状を持つことが不運であるとはどういうことであるのか。これは、簡単に言うなら、患者と同じ属性を持つ集団、すなわち年齢や生物学的な性別などが同じである集団において多数派であるような状態と比較したとき、それよりも悪

い状態であることを意味している。これは価値判断とは無関係であるように見えるかもしれない。だが、「患者と同じ属性を持つ集団」を決める際に、どのような属性を考慮するか（例えば、民族の違いを考慮するか否か）には、何らかの価値判断が入りこむ可能性がある。

最後に、③は、その症状が現在において治療可能でなくとも、将来治療できるようになる可能性があるならばこの条件は満たしていると解釈すべきである。これは、科学(医学や生物学)にのみ関係する条件であり、やはり価値判断とは無関係であるように見えるかもしれない。だが、そこには何が医学の対象であるのかという判断が含まれているため、この条件が満たされているかどうかは純粋に科学だけでは決まらない。

このように、「病気」をそれ以外のものから区別する際には、様々な価値判断が入りこむ。本発表では、Cooper による病気の三条件に関する価値判断の正体を、心因性疾患を具体例としながら検討する。

参考文献

Cooper, R. (2002) "Disease." *Studies in History and Philosophy of Biological and Biomedical Sciences* 33: pp. 263-282.

Reznek, L. (1987) *The Nature of Disease*. Routledge & Kegan Paul.